

巻頭言.....	1	海外交流報告.....	13
新任研究員紹介.....	2	NEAR 短信	20
回顧と展望.....	3	NEAR センター市民研究員の活動一覧	21
参加学会報告.....	11		

タイガー・アンド・ドラゴン

NEARセンター長補佐 佐藤 壮

2000年8月の創刊以来、NEAR Newsも今号で記念すべき第50号を迎えた。読者の皆様の引き続きのご愛顧を宜しくお願い申し上げます。さて、節目の号の巻頭言執筆とは荷が重いですが、この機会に筆者が代表を務めた2年間の共同研究の取り組みを総括したい。

本研究「中国の台頭と北東アジア地域秩序の変動—中国国内統治との共振性に着目して—」は、平成26～27年度北東アジア地域学術交流助成金の共同プロジェクトとして採択された。本研究は、中国の台頭によりパワー・バランスの変動期にある北東アジア地域で、どのような地域秩序の変容が生じようとしているのか現状を把握することを目指し、アメリカが主導してきたルールを基盤とする自由主義的な既存の国際秩序と中国が目指す（目指そうとする）国際秩序との間に生じる相克と融和や、中国国内の政治・経済・社会の統治構造と国際変動の連動性を明らかにすることを目的とした。

国際政治学では、既存の大国（覇権国）の国力が相対的に低下し台頭する新興大国との国力差が縮まる時、新旧大国間の摩擦や対立が深刻化し、国際秩序の変動さらには覇権の交代につながる可能性を論じることが多い。いわゆるパワー・トランジション論である。アジア地域のライバル国同士のせめぎ合いを「タイガー・アンド・ドラゴン」と表現することがあるが、米中伯仲の時代とも言われる21世紀の国際秩序の行方を見定めるために

も、中国の国際秩序観、大国としての自己認識やアイデンティティー、対外政策を支える国内的基盤を捉えることが重要であろうとの問題意識から出発した。

本研究は、2年間の研究助成期間内に、NEARセンターが学術交流を展開してきた北京大学国際関係学院、復旦大学国際問題研究院、東北師範大学東亜文明研究中心と合同国際会議やシンポジウムを開催しながら研究を深化させて以下の点を明らかにし、所期の目的を達成した。第1に、中国はアメリカが主導する既存の自由主義的覇権型秩序の枠内で経済成長を遂げて大国化しつつ、中国自ら新たな国際政治経済秩序の萌芽とも言えるアジア・インフラ投資銀行設立や「一帯一路」構想など開発優先主義とも言える独自の国際秩序構想を提起するに至ったことを示した（佐藤）。梁雲祥（北京大学教授）は、建国後の中国外交を3つの時期に区分し（毛沢東時代の革命外交、鄧小平時代の経済発展重視外交、ポスト鄧小平時代の大国外交）、既存の国際秩序の中で新安全保障観に基づく経済連携や多国間協調を基調としつつも歴史的な失地回復を志向する側面を持つことを明らかにした。

第2に、江口伸吾（島根県立大学教授）は、R.ダールの「ポリアーキー」概念にある「自由化/公的異議申し立て」と「包括性/参加」を援用しつつ、中国では「閉鎖的抑圧体制」の内に「擬似的な競争的寡頭体制」が中長期

的に生まれつつあるという仮説に基づいて、中国の「参加」状況に検討を加え、現代中国外交の国内社会的基盤として、「新常态」期にある中国の政治社会統合における「参加」問題の重要性を指摘し、習近平政権の「群衆路線」を通して中国政治社会のガバナンス構築プロセスを明らかにした。

第3に、中国外交の国内社会・経済的基盤に関して、王逸舟（北京大学教授）は、中国が大国外交を推進するには国内的安定が不可欠であるとし、経済成長の富の再分配による国内格差の是正、産業構造の転換、市民的権利の充足、国際基準に呼応する開放的な国内的法の支配の実現などの諸課題への対処が必要であることを明らかにした。宇野重昭（鳥根県立大学名誉学長）は、習近平指導下の中国が転型期の厳しい変化の下にある（転型とは転換より本質的变化）とし、中国のリーダーシップは、国内の難局突破の方向をいまだ明確なものにしていないため対外関係にも危険な兆候があらわれ得ると指摘する。また、中国社会そのものが西方世界の近代化モデルに接近しながらなお中国自身の近代化経験を軸としてこれを世界大に広げた国際秩序観を推進していくものと予測し、社会全般の転型に40年も50年も要する間、国内基盤の不十分な中国外交が現在の国際秩序に巻き込まれて危険な選択をすることがあり得ることを危惧する。今後望まれる方向は西欧・日、中国、第三世界などの良質な側面が選択され、相互

に補い合う多義的国際秩序が構成されることであると論じた。

第4に、東アジア国際関係史の観点に立てば、ワシントン体制が崩壊した1920年代後半～30年代の日本によるアジア秩序形成の企てと挫折が持つ21世紀東アジア秩序への示唆が重要となるが、石田徹（鳥根県立大学講師（当時））は、「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏（構想）」の前段階で近代日本外交が「旧外交」を受容し、次いでその「学習」の成果であろう「幣原外交」の有り様、その「破綻」の序曲としての「満洲事変」、終曲としての「東亜新秩序」という流れを描き出し、重光葵や三木清、さらには矢内原忠雄の外交論・秩序論に潜む現状追認の志向性を明らかにした。

このように本研究は、北東アジア国際秩序論の学術的発展に寄与すると同時に、中国の内政と外交の構造的連関性の多面的課題を検討したところに学術的特色と独創性がある。また、本研究は、2年間の研究活動を通して国際学術交流の実質的深化に取り組み、山陰地方における北東アジア地域秩序研究や日中関係研究の拠点形成・強化に一定の成果を上げた。同時に、2014年11月開催の東北師範大学東亜文明研究中心との合同国際シンポジウムおよび2016年3月開催の北京大学国際関係学院との合同国際シンポジウムは、地域の一般市民にも広く公開されそれぞれ50名を超える聴衆に恵まれ地域社会・一般市民への貢献も果たせた。

新任研究員紹介

《NEAR センターは、2016年4月より新たに1名の研究員を迎えました。前田しほ研究員（特任助教）をご紹介します（編集部）》



NEARセンター研究員

前田 しほ

今年度始動した人間文化研究機構のネットワーク型基幹研究プロジェクト北東アジア地域研究推進事業には5名の研究員が採用され、それぞれ国立民族学博物館、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域

研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センターの各拠点に派遣されています。NEARセンターには、私、前田しほが4月1日より派遣されております。拠点のプロジェクト運営にかかわる実務を研究者としての立場から補佐しています。本プロジェクトでは研究面での貢献も期待されているということで、科研費も引き続き使用できる環境を整えていただき、感謝しているところです。

専門はロシア文学・文化です。ロシアについて勉強を始めたのが富山大学人文学部で、学部間協定に基づくイルクーツク言語大学への交換留学を経て、北海道大学大学院文学研究科に進学しました。ここでは精緻なテキスト読解の訓練を徹底的に受け、1980年代ペレストロイカの時期に一世を風靡した女性作家ワレーリヤ・ナルピコワの小説を研究し、2006年に博士号を取得しました。ただ、当時はロシア文壇でも、日本のロシア文学会でも女性文学は軽視されており、女性文学研究自体が評価されにくい状況にありました。女性文学など研究する価値はない、と言われたことは一度ならず。とはいえ、そもそもナルピコワの小説に着目したのも、文化的社会的に適切とされる「女らしさ」に対する女性の抵抗や生き方の模索に興味があったからでした。というのも、ソ連の革命は、今日の視点から見ても、ラディカルな「女性解放」をやったのけました。「男女共同参画社会」をいち早く実現したのです。日本とは比較にならないほど、女性は経済的政治的に自立し、現在のロシア女性（のみならず旧ソ連の女性）にもその自立したメンタリティは受け継がれていて、一度も結婚せずに、父親の異なる子供を何人も育てているシングルマザーでも、社会に受け入れられる、例えば、保育園の園長を務めることが、ごく普通に受け止められる社会なのです。しかし、そうした社会でも女性は生きづらさを抱えているということが、ロシア女性たちのテキストを通じて、そして生身の彼女たちと付き合っ、感じるころでした。このように、私の研究の原点はごく素朴な疑問や共感です。しかし、モチベーション維持には格好で、大学院修了後、札幌市内外での非常勤講師、北海道大学スラブ研究センター研究員、日露青年交流センター若手研究者等フェロー、東北大学東北アジア研

究センター特任助教を歴任しながら、苦節10年、研究の射程を広げてきました。制度としての文学がジェンダーやナショナリティの構築にいかに関与しているか、さらにソ連の女性（や男性）がいかに関与しているのかという点に関心を寄せ、現在もっとも注目しているのが戦争表象です。さらに旧ソ連の制度としての文化が(旧)社会主義国がいかに関与したかという点にも関心を持って調査を進めているのですが、実は、そうした地域が北東アジア地域と大きく重なるという点で、本センターへの赴任には縁を感じています。

回顧と展望

NEARセンター研究員 2015年度研究活動自己点検

《NEAR センター研究員（2015年度から所属継続）が、過去1年間の研究活動を振り返り、今後の展望を語ります（編集部）》

NEARセンター長 **井上 厚史**

昨年度行った主要な研究成果は、以下の通り。

○5年間に及んだ科研「東アジアにおける朝鮮儒教の位相に関する研究」（研究課題：23242009、基盤研究（A）、代表：井上厚史）の最終年度として、香港科技大学での儒教ワークショップ（6月10日～14日）、および東京大学での第九回研究会（9月10日～14日）を開催し、多くの研究成果を得ることができた。

○人間文化研究機構（NIHU）ネットワーク型基幹研究「北東アジア地域研究」の5つの研究拠点の一つとなるべく、センター長として参加。申請書の作成に尽力し、無事6年間の共同研究がスタートし、キックオフ・シンポジウム（1月23日）に参加した。

○「2015復旦大学国際問題研究院・島根県立大学国際学術検討会」（9月22日開催）において、「一带一路と全体大用」という題目で基調報告を行った。

○韓日文化交流基金主催＜2015年度韓日国際学術会議＞（11月6日開催）において、「韓国文化の中における排日感情と大衆心理の間

題」という題目で発表を行った。

○「第13回西周シンポジウム」において、「西周「国民気風論」を読む」という題目で発表を行った。

○「東北大学東北アジア研究センター創設20周年記念企画国際シンポジウム」（12月5日開催）において、「＜北東アジア学＞創成に向けての課題」という題目で発表を行った。

○復旦大学哲学学院主催「東亜朱子学国際学術検討会」（12月27日開催）において、「朝鮮儒学における「心学」の位相」という題目で発表を行った。

○【書評】中純夫著『朝鮮の陽明学—初期江華学派の研究』京都府立大学『洛北史学』第17号、99-105頁。

○【書評】岡本隆司編『宗主権の世界史』『図書新聞』3202号。

○「李藝と石見のつながり—『朝鮮王朝実録』『同文彙考』『漂人領来臆録』を手がかりとして—」『北東アジア研究』第27号、25-48頁。

○朱人求・井上厚史主編『東亜朱子学的新視野』商務印書館、および『高橋亨與韓國儒學研究』臺灣大學出版中心の出版。

昨年同様慌ただしい中での研究活動となり、数年来の懸案となっている『原典朝鮮近代思想史』第1巻（岩波書店、2017年刊行予定）の作業が滞っており、来年度中には何とか完了させたいと思っている。

NEAR副センター長 福原 裕二

昨年度来の研究上のモットーを、私は「コミュニケーション」ならぬ「コミュNEAR（ニア）ケーション」にしている。North East Asian ResearchにおいてNorth East Asian Regionの人びととの対話をこれまで以上に重視する研究姿勢の発露である。その一環が可能な限り研究対象の現場へ足を運ぶことである。昨年は鬱陵島へ2度ばかり行き、その足で韓国の東海岸を踏査した。北朝鮮の平壤や中国の上海にも赴いて研究上の意見交換を行い、国内では利尻島での研究集会に参加した。縁あって、「漁業経済学会」（於東京海洋大学）のシンポジウムで研究報告を行う機会も得た。

私は近著で北東アジア学の一つの有力な研究視座として、「国家の論理やニーズを優先

視し諸問題群を包摂しようとする、ということから離れて、市民社会やある事象を問題として捉え認識する人びと・集団の側の論理・ニーズを意識的に拾い上げる」ことを主張した（『北東アジアと朝鮮半島研究』国際書院、2015年・P.173）。現場や真摯な学術討議の場に行くと、国家や国民といった曖昧模糊とした存在に根差す言説ではなく、一人一人の姿やそれぞれの特質を持った地域の実体に根差す議論に出会うことが出来る。あらゆる垣根を越えていくことによって新しい何かが見えてくる≡「超域」研究の重要性を改めて実感した一年だった。

こうした研究活動の成果としては、以下のものが挙げられる。『独島問題は日本でどのように論議されているのか？』（福原裕二他著、ソウル・JNC、2015年）。「竹島／独島周辺海域・日韓暫定水域をめぐる漁場紛争の論点」（『漁業経済研究』第60巻第1号、2016年1月）。「韓国・鬱陵島現地調査報告：『国境』との関わりで」（『JunCture』第7号、2016年3月）。



雄大な利尻富士

今年度もまた「コミュNEAR（ニア）ケーション」を意識しつつ、「領土問題と漁業問題の交錯状況の克服」をテーマとする科研の調査（今年度が最終年度）、北東アジア国際関係における「心の問題」の考究と取りまとめ、「北朝鮮の対日行態と論理」をテーマとする研究を継続する。さらに、今年度から本格的にスタートしたNIHUの「北東アジア地域研究推進事業」において私に与えられたテーマの構想を深めていく所存である。

NEARセンター長補佐 **佐藤 壮**

2015年度の研究活動は、「中国の台頭と北東アジア地域秩序の変動—中国国内統治との共振性に着目して—」（平成26～27年度北東アジア地域学術交流研究助成金共同プロジェクト：佐藤壮研究代表）を中心に展開した。本研究プロジェクトは、鳥根県立大学北東アジア地域研究センター（NEARセンター）の研究員・客員研究員を中心とする研究グループにより、学外研究者および中国・北京大学国際関係学院や東北師範大学東亜文明研究中心の研究者の協力を得ながら国際的共同研究体制で進められた。本研究の目的は、中国の台頭によりパワー変動期にある北東アジア地域において、いかなる地域秩序の変容が起こりつつあるのか現状を把握し、既存の国際秩序と中国が目指す（目指そうとする）国際秩序との間で生じる相剋と融和（「第一の共振性」）や、中国国内の政治・経済・社会の統治構造と国際変動との連動性（「第二の共振性」）を明らかにすることであった。本研究プロジェクトは2年間の研究助成期間内に、北京大学国際関係学院および復旦大学国際問題研究院との合同国際学術会議・シンポジウムでの研究報告をおこない、所期の目的を達成したと言える。なお、本プロジェクトの成果の2017年3月書籍出版に向けて準備中である。

個別の研究報告・論文については以下の通りである。2015年9月21日に復旦大学国際問題研究所との国際学術会議「中国の内政・外交課題と国際秩序」を中国・上海で開催し、「東アジア地域秩序構想のパラダイムと日中米関係—安全保障と経済の相互連関性—」と題して報告した。また、2016年3月5日、6日に北京大学国際関係学院と合同国際シンポジウム「国際秩序をめぐるグローバル・アクター中国の『学習』と『実践』」を鳥根県立大学浜田キャンパスで開催し、「グローバル・アクター中国の対外政策とマルチラテリズム」と題して報告した。さらに、宇野重昭・江口伸吾・李曉東編『中国式発展の独自性と普遍性—「中国模式」の提起をめぐる—』（国際書院、2016年）に、「新興大国・中国と東アジア地域秩序—国内秩序と国際秩序の相互作用の観点から—」が所収された。

学内研究会では、福原裕二・NEAR副セン

ター長が主催する「北東アジア国際関係における“心の問題”プロジェクト」に参加し、「『心の問題』と国際政治学—紛争後社会における和解の実現と正義の回復の観点から」（2015年11月）と題して報告をおこなった。この「心の問題プロジェクト」では、2014年に引き続き朝鮮民主主義人民共和国を訪問し（2015年11月）、朝鮮社会科学院、金日成総合大学、人民大学習堂などでの視察・研究者との議論を通じて、現地の社会科学の国家政策上の位置づけや大衆教育の現状などを確認する事ができ、誠に有意義であった。

NEARセンター研究員 **石田 徹**

2015年度の研究活動はおおよそ以下の通りである。

①「前近代日朝外交における「訳官使」の基礎的研究」：2015年度、新たに科研費の助成（基盤研究C:15K02837）を受けることになった。主たるテーマはこれまでと変わらず日朝関係史だが、これからは時期をやや遡り、17～19世紀の対馬と朝鮮との関係に焦点を絞って調査・研究を進めていく。昨年度は長崎県対馬歴史民俗資料館・韓国国史編纂委員会がそれぞれ所蔵する宗家文庫の史料調査・収集（前者12月、後者3月）を中心に進め、また東京大学史料編纂所での史料調査も行った（9月）。また、12月11日には前近代東アジアの外交概念の一つである「交隣」についての研究会（於：京都府立大学）に参加・報告した。

②学長裁量経費による共同研究（「幕末～明治前期における知的情報の流通状況の把握とそのデジタル・アーカイブ構築—隠岐・宇野家の場合」）を通じて、宇野重昭本学名誉学長所蔵の古文書の整理とデジタル撮影、ならびにそのアーカイブ化作業を進めた（<http://near-archive.jp>にて公開中）。

③2016年3月5日に開催された鳥根県立大学・北京大学国際関係学院合同国際シンポジウム「国際秩序をめぐるグローバル・アクター中国の『学習』と『実践』」第3セッションで「近代日本外交における『学習』をめぐる」と題する報告を行い、翌6日には同シンポの総合討論に参加した。

④NEARセンターでの出張：2015年11月3日～11月9日の日程で朝鮮民主主義人民共和

国を訪問し、錦繡山太陽宮殿や中央博物館、祖国解放戦争勝利記念館などを見学し、社会科学院の方々との座談会に参加するなどして、日本にいたるだけでは得られない貴重な見聞を深めることが出来た。

2016年度以降の展望として3点挙げておく。

①「前近代日朝外交における「訳官使」の基礎的研究」：昨年度に引き続き、宗家文庫の史料調査・収集を中心に研究を進める。

②人間文化研究機構による北東アジア地域研究プロジェクトの拠点メンバーとして、拠点の掲げるテーマ（北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響）をめぐる研究を行う。本稿執筆時点では、近代（移行期）の日本の外交概念・空間の形成などについて、とくに対馬（ないし日朝関係）を軸とした研究を構想している。

③本欄恒例となつてしまい甚だ忸怩たる思いがあるが、2016年度には5年越しの懸案である、飯田泰三名誉研究員・井上厚史研究員と共同で行った朴忠錫『〔第2版〕韓国政治思想史』の翻訳出版がある。現在初校中なので今年度中には刊行の運びとしなければならない。

NEARセンター研究員 **井上 治**

昨年度は、研究分担者として参加した科研費研究の成果として、モンゴルのL.Altanzaya教授との共著“A Consideration on 清代乾隆期科布多疆域図 Shindai Kenryuu-ki Kobudo Kyouiki-zu (The Frontier-Area Map of Hovd in Qianlong Era of Qing Dynasty).”を刊行した(C.Чулуун eds. *Монголын газрын зураг, газрын нэр судлал*. Улаанбаатар. 80-99.)。また、島根県立大学メディアセンター所蔵の戦時プロパガンダグラフィ誌『FRONT』モンゴル語版の全文テキストと和訳に簡単な解題を添えて史料紹介として刊行した(『FRONT』「海軍号」「陸軍号」モンゴル語版)、『北東アジア研究』27、143-155頁)。

研究活動としては、従来より続けているモゴール語研究会を引き続き開催した。夏期休業期間中には代表を務める科研費による研究のためフフホト市の内モンゴル社会科学院で

共同研究に従事した。また、石見神楽の古い演目の一つで、元寇に題材を取った「風宮」に関する調査に着手した。「風宮」は長いこと上演されていなかったもので、これを伝承する社中を探しあて、次年度の公演実現に目処を付けた。これとあわせて、伊勢神宮の風宮と風日祈宮をたずね、せんぐう館と神宮徴古館で資料を調査・収集した。



石見神楽「風宮」の一幕

この年は内モンゴル自治区、ブリヤート共和国からの訪問研究者を受け入れ、タタールスタン共和国の研究者とはシンポジウムも開催した。この年は、人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」の拠点の一つに選ばれたNEARセンターが次年度から着手する共同研究において、近代モンゴル国史編纂研究の初歩的構想を報告する機会があった。

この年、印象深かったのは、NEARセンターの主だった研究員とともに北朝鮮を訪問したことであった。とくに、朝鮮社会科学院所属の中世史研究者との懇談を通じて北朝鮮における研究状況の一端を知ることができたのは有意義であった。北朝鮮の朝鮮中世史の研究情報は得にくいので、研究者として置かれている立場の違いを認め合いながら、研究上の交流につながれば意義深いことであると感じた。

NEARセンター研究員 **江口 伸吾**

2015年度は、主として、中国の国内政治・社会の変化を追うとともに、中国外交や国際秩序との相互連関を考察することにとり組んだ。以下に、その内容を紹介する。

第一に、「新常态」を迎えて不透明感が強まる中国の政治社会において、党・国家による統治能力の再編の試み、並びにそれが対外政策に与える影響を考察した。これに関して、「“新常态”下的中国外交的社会基礎：圍繞現代中国的政治社会統合」（復旦大学国際問題研究院・鳥根県立大学主催「中国的内政、外交課題与国際秩序」国際学術研討会、2015年9月22日、於上海・復旦大学）、並びに「現代中国における政治社会改革と対外政策へのインプリケーション－『新常态』の転換期を迎えて－」（北京大学国際関係学院・鳥根県立大学合同国際シンポジウム「国際秩序をめぐるグローバル・アクター中国の『学習』と『実践』－外交・内政の共振と歴史の視点から－」2016年3月5日、於鳥根県立大学）として、その成果を公表した。

第二に、「中国模式」論をとり上げ、独自の発展を目指しながら普遍的価値との間で矛盾・相克を深める現代中国に焦点を当て、中国の国内社会と国際秩序の変化について考察した。これに関して、『中国式発展の独自性と普遍性－「中国模式」の提起をめぐる－』（共編著、宇野重昭・江口伸吾・李曉東編著、国際書院、2016年3月、「はじめに－転換期における中国式発展の行方－」「第5章 現代中国の国家建設と『公民社会』のガバナンス－市民社会・ボトムアップ型国家コーポラティズム・人民社会をめぐる－」「あとがき」を分担執筆）として、その成果を公表した。

第三に、拙稿「菱田雅晴編著『中国－基層からのガバナンス』法政大学出版局、2010年（書評）」（『中国研究月報』Vol. 67 No. 4、2013年4月、所収）が翻訳・転載され、『当代日本中国研究』第五輯／政治・対外関係（共著、日本人間文化研究機構現代中国区域研究項目編、社会科学文献出版社、2016年3月、「菱田雅晴『中国－基層社会管理』（書評）」を分担執筆）として出版された。

近年、中国は、その増大する国力を背景に海洋進出を積極化させ、近隣諸国との間の軋轢が深まった。他方国内に目を移すと、腐敗問題、格差問題、構造改革などの諸々の重要課題が山積しており、国内外の諸問題への対処を誤れば、統治の根幹を揺るがす事態に発展しかねない脆弱性も抱えている。それゆえに、「新常态」の転換期に入った現代中国に

において、国内政治と外交の相互連関を重視した考察が今後一層求められると考えられる。

NEARセンター研究員 高 一

2015年度においては、1974年から76年という短い期間における「朝鮮停戦協定体制の変容と北朝鮮の対応」について、実証的研究に取り組み始めた。それは、それまでに組みこんできた、1970年代初頭における「朝鮮停戦協定体制の変容と北朝鮮の対応」に関しての、いわば続編と位置づけられるものである。

作業の手始めとして、『労働新聞』の閲覧・収集に努めた。主に1974年から76年にかけての北朝鮮の国際情勢認識と対外関係の展開、とりわけアメリカとの関係についての認識の把握を試みた。

この作業を通じて、次のような知見を得ることができた。第一に、北朝鮮側が、米韓軍側による停戦協定違反を頻繁に非難していた点である。例えば、1976年8月に板門店の共同警備区域において、「ポプラの木事件」としても知られている北朝鮮兵士による米軍将校2名殺害事件が発生したのであるが、そのような事件発生のはるか前から、北朝鮮の側では、前線の部隊において、米韓側の軍事行動に対する警戒心が募っていた。

第二に、より大きな問題として、北朝鮮側の米韓側に対する軍事的脅威認識が高まっていたと考えられる点である。1976年6月には、その後長年続くことになる米韓合同軍事演習チーム・スピリットが開始されるのであるが、この米韓両軍が参加した世界最大規模の軍事演習は北朝鮮を刺激するに至った。上述のような事件発生の背景として、1970年代初頭における「対話の時期」が過ぎ去り、75年以降顕在化しつつあった朝鮮半島での軍事的緊張状態の高まりが76年にピークを迎えていたことを指摘できるのである。

本研究テーマについては、今後、韓国やアメリカの外交文書を読み進めることによって、一本の論文として研究成果を発表したい。

また今年度は、東北アジアにおける「和解」と国際政治という問題についてあらためて考えるきっかけの年になる。もともと、そのようにしようとしていたわけではなかったのだが、昨年末の「日韓合意」の発表によって、「和

解」を受け入れることへの同調圧力と近年の国際政治の展開とが無関係ではないことが、いまさらながら鮮明になってしまったからであり、この地域における「和解」の実現不可能性の高まりこそが可視化されてしまったと考えられるからである。

NEARセンター研究員 **豊田 知世**

平成27年度は、およそ以下の通り研究活動を行った。

(1)「都市輸出による温室効果ガス削減効果の定量評価に関する研究：科研費・若手研究(B)」が最終年となった。7月にイギリスのUniversity of Surreyで開催されたInternational Society for Industrial Ecology学会にて、“Effect of infrastructure export to economy and carbon dioxide reduction”と題した報告を行った。ここでは、国際援助によるインフラ設備の温室効果ガス削減効果について、発電施設と鉄道を事例に分析した。火力発電施設においても効率改善によって大幅な温室効果ガス削減効果が期待できること、鉄道事業は貨物輸送で大幅な削減効果が期待できることなど報告を行った。

(2)「林資源活用のベストミックスに関する基礎調査：学長裁量経費」、「木質バイオマスを利用したエネルギー地産地消モデルの構築とその波及効果に関する研究：ニッセイ財団環境問題研究助成」などの研究資金を活用し、国内外の木質バイオマス先進地域の情報収集、データ構築を行ったほか、島根県、岡山県、秋田県、高知県への視察やヒアリング等を実施した。また、日本森林学会および森林経済学会に参加し、報告者と意見交換を行った。森林関連の学会は、これまでの筆者の研究分野と異なった農学的なアプローチの研究がほとんどだったが、環境影響評価のような経済学的手法を取り入れた研究も始まっており、平成28年度は他大学・研究センターとの共同研究を進めて行く予定である。研究成果は、COCディスカッションペーパーに「島根県の森林資源によるエネルギー供給の可能性に関する考察」として発表した。

(3)「邑南町における稲作の5次産業化に関する研究：COCしまね地域教育・共創研究助成」では、邑南町の川角集落という平均年

齢80歳、8世帯の地域で行われる稲作を事例に、共同研究者である松江Cの酒元誠治教授の協力のもと米の食味調査等を行った。この結果をもとに、新规定住者の雇用が可能か推計し、中山間地域への新たなビジネスモデルの構築について考察を行った。研究結果は、本学で実施された「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」第3回全域フォーラムにて報告し、現在論文を執筆中である。

(4)「人の移動の要因に関する基礎調査：COCしまね地域教育・共創研究助成」では、人生の節目に「どのような理由で、どこに引っ越したか」といった詳細なデータを集めて分析することで、少子化対策や雇用創出などの政策策定に役立てることを目的に、400名を対象にWebアンケートを実施した。年代別の引っ越し要因と満足度について明らかにし、(3)同様に、本学の全域フォーラムにて報告した。

NEARセンター研究員 **村井 洋**

「戦後70年を忘れない」というのが2015年の私のモットーであった。これは、学問に先行する価値と信念に関わる問題ではあるものの、研究テーマ選択に影響したことは間違いない。

○「心の問題研究会」

日韓の心の食いちがいをハンナ・アーレントの問題構制によって解明することは可能だろうか。アーレントは戦争・暴力への反省(アイヒマン裁判)から発している。優れた先行研究があることを知りつつ、文字通り未熟な研究ノートに留まったが「判断力と歴史ーアーレントと歴史的判断力」を『総合政策論叢』第30号に発表した。この続編「和解の理論」をスタートさせ、何らかの形で研究成果を公表したい。また韓国や中国のアーレント研究者とも意見交換を行いたい。

○立憲デモクラシー研究会

2016年2月成蹊大学名誉教授加藤節氏を迎えて講演会を催し、村井も簡単な研究報告を行った。いわゆる「憲法愛国主義」に関するものである。それを発展させ研究ノートを『総合政策論叢』に発表する運びである。

○書評「非暴力主義の展開ー寺島俊穂『戦争

をなくすための平和学』法律文化社2015年」
（『総合政策論叢』31号）

本書は非暴力の諸理論を紹介する優れた業績である。平和学の輪郭と方法としての非暴力を描き、特にジーン・シャープの非暴力抵抗論を解説した意義は大きいと思われる。

○二つの公開講座

①「今平和を考える」（2015年7月）はカントの『永遠平和のために』など平和理論を紹介したものである。西周が『兵賦論』でアジア太平洋戦争を予言し、周が紹介導入した国際法の知識が江戸無血開城に影響を与えた可能性を紹介した。

②「判断力はいかが」（2015年12月）は日常生活から政治的場面に働く人間の精神作用を検討したものである。人気の“ときめきの整理術”（近藤麻理恵氏）がカントの美的判断力と持つ共通点を指摘し、「ソロモン王の裁き」を例として紛争の中に新しい基準を発見して和解に導く反省的判断力の核心が込められていることなどを明らかにしようとした。

○西周研究会・津和野シンポジウム

「明六社と西周」として2015年11月29日にシンポジウムを開催した。幹事の一人として役務を果たした。講師を務められた河野有理先生、苅部直先生、松島弘先生、井上厚史先生に感謝したい。

NEARセンター研究員 **ムンフダライ**

2015年度の研究は、主として科研費研究課題「アルタイ諸語の「華夷訳語」のコーパス構築と漢字音訳方式の研究」を中心に行った。「華夷訳語」には「甲」「乙」「丙」の三種があり、そのうち、アルタイ諸語に関わるのは、モンゴル語が扱われている「華夷訳語」（甲種本と乙種本）および「韃靼訳語」（丙種本）があり、ウイグル語が扱われている「高昌館雑字」（乙種本）、「畏兀兒館訳語」（丙種本）があり、女真語が扱われている「女真訳語」（乙種本）、「女直訳語」（丙種本）がある。本研究は、アルタイ諸語の上述7種の「華夷訳語」を取り上げ、音訳された語と音訳漢字の対応関係を反映したパラレルコーパスを構築し、各々の漢字音訳方式の解明を目的としている。2015年度は科研費の最終年度であり、研究を以下のように実施した。(1)前年度に引

き続き、作成した各種「華夷訳語」のパラレルコーパスの校正と調整を行ったうえ、各々の電子テキストを再現し、研究目的に沿って、データの抽出と分析を行った。(2)これまでの研究により、アルタイ諸語の上述7種の「華夷訳語」のパラレルコーパスを構築し、各々の電子テキストを再現した。(3)作成したコーパスに基づき、音訳漢字の使用状況、表記された音の種類、音訳における各言語の音と音訳漢字との対応関係を明らかにし、漢字一つ一つの「語頭・語中・語末」における出現位置や頻度、全用例など音訳漢字の使用状況を反映したデータベースを作成した。(4)各種「華夷訳語」のうち、ウイグル語が扱われた「畏兀兒館訳語」の研究成果を『「畏兀兒館訳語」の漢字音訳方式の研究』という本としてまとめ上げ、今年、内蒙古人民出版社より刊行される予定である。

今までの研究を通じて、アルタイ諸語が扱われた「華夷訳語」のパラレルコーパスを構築し、データの抽出作業も既に終えているが、各種「華夷訳語」の音訳漢字の使い分けの分析、漢字の「音以外要素」の音訳への関与についての検討、漢字声調の音訳への関与についての考察はまた進行中であり、今後引き続き、これらの諸作業を推進していくつもりである。また、「畏兀兒館訳語」以外の「華夷訳語」に関しても、各々の研究成果を逐次に著書として取りまとめていくつもりである。

NEARセンター研究員 **山本 健三**

平成27年度は、「19世紀後半から20世紀初頭にかけての北東アジアにおける「ロシア問題」」というテーマに対して学長裁量特定対応経費をいただき、主にこのテーマを軸に研究を進めたが、筆者の研究人生にとって重要な出来事がいくつかあった。

そうした出来事として最初に挙げなければならないのは、8月に幕張メッセと神田外国語大学で開催されたICCEESS（中・東欧研究国際評議会）世界大会への参加である。筆者は“Yellow Peril —Anti-Asian Sentiments in a Comparative Perspective”というパネルで“Michael Bakunin’s Paradoxical Version of ‘Yellow Peril’”と題した報告（英語）を行った。内容は、これまで筆者が行ってきた「バ

クーニンの黄禍論」についての研究の総決算である。スラヴ・ユーラシア地域の専門家が世界中から集結した国際会議で多くの研究者と議論できたことは、有意義な体験であった。

次いで重要なのは、筆者の主要研究対象の一人であるミハイル・バクーニンの故郷で7月に開催されたプリヤムヒノ（バクーニン）学会への参加である。ここでは「暴力の批判もしくは擁護——朝鮮人アナキスト申采浩」と題した報告（ロシア語）を行い、申采浩の「朝鮮革命宣言」に代表される暴力肯定論の論理構造について論じた。ただし、同学会の参加者にはアジアの革命運動、アナキズムに関心を持つ人がおらず、反応は芳しくなかった。



ロシア・プリヤムヒノ学会の参加者たち

国際学会での報告以外では、ロシアの研究者の求めに応じて、「1860年代後半カール・シレンの「ロシア脅威」論」（ロシア語）、「20世紀初頭日本の社会主義系定期行物における宗教問題」（ロシア語）、「シュミットとバクーニン」（ロシア語）という3本のペーパーを執筆した。その他、先頃完結した『大杉栄全集』（ぱる出版）の第12巻月報に「大杉栄の外国語学習」という雑文を寄せた。

来年度は、筆者にとって最初の著書、『帝国・〈陰謀〉・ナショナリズム——「国民」統合過程のロシア社会とバルト・ドイツ人』（第2回法政大学出版局学術図書刊行助成対象作品）が刊行される。同書は、1860年代後半ロシアのバルト・ドイツ人をめぐる論戦とロシア・ナショナリズムとの関係性についての博士論文に新たな研究成果を加えたものである。現在、平成28年8月25日刊行を目指して作業中である。

NEARセンター研究員 李 曉東

2015年度の研究成果として、（宇野重昭・江口伸吾・李曉東編著）『中国式発展の独自性と普遍性——「中国模式」の提起をめぐる一』国際書院、2016年3月、を出版した。執筆した論文「百姓（バイシン）社会：中国の『市民社会』の語り方」では、「つながり」の形成の視点から中国における「百姓社会」の構築の必要性を説いた。

研究報告は全部で四つ行った。まず、5月に中央大学の「ワン・アジア」講座で「近代の日中留学交流」と題する講義を行った。講義内容は今年度出版する『近現代東アジアと日本——交流・相剋・共同体』に掲載される予定である。次に、7月に北陸大学で開催された北東アジア研究交流ネットワーク（NEASE-NET）第10回フォーラム&国際シンポジウムで「日中関係とASEAN」と題する報告を行った。そして、2016年2月に、まず、自分の科研「中国格差社会における『つながり』の生成——基層社会の弱者に対する支援を手掛かりに」のワークショップで、「百姓社会」論を報告し、その後、20日に「『民彝』から『平民主義』へ」と題する報告を「東アジアの近代化と社会民主主義」プロジェクト（研究代表：井上厚史）の研究会で行った。

研究調査面では、2014年度に始まった自分の科研は、2015年度も二度中国に出かけ、南京市（9月）と深圳市（2月）で都市部の社区に対する調査を行い、中国における「社区建設」の最新動向を把握した。そして、11月に、NEARセンターの研究員とともに、北朝鮮に赴き、研究調査と交流を行い、貴重な経験を得た。

また、学会活動として、5月に政治思想学会（於武蔵野大学）、6月に東アジア近代史学会（於東京女子大）、10月に日本政治学会（於千葉大）に参加し、6月と11月にそれぞれ香港と東大で開催された科研研究会（井上厚史教授代表）に出席した。さらに、NEARセンターの研究活動として、11月に定例の「西周シンポジウム」に関わり、3月に北京大学国際関係学院との合同シンポジウム「国際秩序をめぐるグローバル・アクター中国の『学習』と『実践』～外交・内政の共振と歴史の視点から～」の司会とコメンテーターを務めた。

参加学会報告

“北東アジア地域研究の挑戦”

人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点スタートアップ学術会議

NEAR副センター長 福原 裕二

2016年5月28/29日の両日、ここ浜田で標題の学術集會が開催された。本事業の展開においては、専門性の高い複数の研究拠点が相互補完的に共同設置され、拠点間ネットワークを構築することによって、特定重要地域の全貌を理解し、関連する重要問題の解明が目指されており、その意味で本学術会議は今後の事業展開を期待させる有意義な開催となった。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点（以下、スラブ研拠点）は、「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」を中心研究テーマとする本事業において、国際関係・政治領域を担当分野とし、「北東アジアにおける地域フォーラムの軌跡と展望に関する研究」を拠点内の中心テーマにしている。端的に言えば、北東アジア地域とそこでの国際関係における‘現在’を照射する。そこでは、第一に、北東アジア国際関係の昨今の政治・外交状況を分析・整理する。その上で、第二に、北東アジア地域には東南アジアや中央アジアに比較して、地域統合はおろか未だに地域を包摂するフォーラムさせ存在しないことを問題意識に、冷戦終結直後、とくに1990年代前半にブームとなった『北東アジアの共同の家』構想などの頓挫の原因を総括するとともに、対照的に地域におけるフォーラムや会合を定着させ、これを機構へと成長させた東南アジアや中央アジアなどユーラシアの他地域の事例から学ぶことにより、北東アジアにおけるフォーラムの創設と機構化へのアジェンダを包括的に研究し、その成果を提言としてまとめることを研究プロジェクトの課題としている。

そこで、スタートアップ学術会議として実施された本学術会議では、大まかには、①「コラボレーション研究会」を通じて、NEARセンター拠点との研究交流を図る一方で、北東アジア地域／北東アジア地域研究の省察と教訓、魅力と可能性を話し合い、②「講演&座談会」を通じて、開催地（浜田）の後背から北東アジアへと広がる環（めぐ）りの海をテーマに具体的な北東アジアの諸課題の検討と構想を巡らすことを目的とした。

第1日目の「コラボレーション研究会」では、まず「北東アジアの共同の家」構想の提唱者で、『北東アジア共同の家：新地域主義宣言』（平凡社、2003年）の著者である和田春樹氏（東京大学名誉教授）に問題提起を兼ねて「北東アジア地域研究の挑戦と課題」と題する講演を行っていただいた。次いで、「拠点研究報告」では、スラブ研拠点、NEAR拠点の代表者に拠点で行う共同研究の概要を紹介してもらって拠点間の情報共有を図るとともに、それぞれの共同研究の視点・観点から問題提起に対するコメントを行っていただいた。こうした個別の発表に基づいて、「議論」ではスラブ研拠点、NEAR拠点メンバー全員の参加により、北東アジア地域／北東アジア地域研究の省察を踏まえて教訓を引き出し、魅力を捉えて可能性を考察する熱心な議論が展開された。

第2日目の「講演&座談会」は、スタートアップ学術会議を浜田で開催することが決まった折、スラブ研拠点代表者の岩下明裕先生から福原に対して、「折角の機会だから、研究者向けの学術会合で終わらせたくない。市民の参加を仰ぐような形で、浜田らしいセッションを考えてくれないか」との要請があり企画されたプログラムである。浜田の後背には北東アジアに開かれた海洋が存在する。その海洋には本来可視化されない境界が‘二国間’の取極で張り巡らされており、そのため‘多国間’に開かれた環（めぐ）りの海が十分に活用されるどころか、循環せず悲鳴をあげているような現実がある。それは北東アジア地域の現状を象徴してはいないだろうか。

このような企画者の思いもあり、「講演&座談会」では、まず日本を巡る内外の漁業状況に国内でもっとも精通する濱田武士氏（北海学園大学教授）に「北東アジアの海をめぐる国境漁業の現状」と題する講演を行っていただいた。これを踏まえた「座談会」では、和田先生、濱田先生、そして境域問題に精通する岩下先生に加えて、地元の漁業・水産業を熟知する専門家（安達二郎氏、西野正人氏）をまじえて討議を行い、さらにすべての拠点

メンバーをも巻き込んで、海の問題を題材にしつつ、北東アジアの諸課題とこれを乗り越えていく構想を議論した。

なお、本学学術会議の開催報告は、スラ研究拠点のホームページ (<http://src-hokudai-ac.jp/northeast/>) にも掲載されています。情報満載、是非ご一読を！



2016年5月29日 山陰中央新報（1面）

“北東アジアにおける 近代的空間の形成とその影響”

人間文化研究機構「北東アジア地域研究 推進事業」島根県立大学NEARセンター拠点 スタートアップ学術会議

NEARセンター長 井上 厚史

2016年6月18日（土）19日（日）の両日、本学講義研究棟大演習室2にて、本学より参加した井上厚史、井上治、李曉東、石田徹、前田しほの5名の他に、小園晃司（日文研機関研究員）、岡洋樹（東北大）、波平恒男（琉球大）、パールィシエフ・エドワルド（筑波大）、王中忱（清華大）、黄克武（台湾・中央研究院）、娜荷芽（内モンゴル大）、天野尚樹（山形大・北大拠点メンバー）、福原裕二（島根県立大・北大拠点メンバー）、孟達来（島根県立大）、村井洋（島根県立大）の諸氏が参加して、本学を研究拠点とする「北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響」研究プロジェクトについて真剣かつ実質的な意見交換を行うことができた。残念ながら、今回は連携研究機関である国際日本文化研究センターの3名の研究分担者があいにく欠席となったが、小園晃司氏が代理で参加してくださり、協議をスムーズに進行させることができた。

会議の詳細については、まず井上厚史が研究プロジェクトの概要を説明し、次に出席者各自が自己紹介を兼ねて、現在取り組んでい

る研究内容、および本プロジェクトにおいて寄与しうる研究テーマについて説明してもらった。その結果、

(ア) 認識、(イ) 統治理念、(ウ) 交流、(エ) 表象の4つの重点テーマを特立させ、今後の研究を進めていくことになった。

次に、11月に開催予定の国際シンポジウムについて協議した結果、2016年11月19、20日に本学コンベンションホールにて開催し、【北東アジア：胚胎期の諸相】（近代の胚胎期とは、おおむね17世紀を想定）をシンポジウムのテーマとすることで決定した。また、上記(ア)～(ウ)のテーマに基づいた三つのセッション、すなわち第一セッション「認識：自己認識あるいは歴史」、第二セッション「統治理念」、第三セッション「交流」を設定することになった。なお、(エ)表象については、時代性が合わないため、初年度のシンポジウムのセッション設立は見送ることになった。

また、年に一度の国際シンポジウムとは別に、「近代的空間の形成とその影響」研究会を立ち上げ、今後本学あるいは国際日本文化研究センター、さらに東京の早稲田大学等で研究会を開催することで合意した。

総じて、国内外の優秀な研究者が結集した結果、活発な（時には白熱した）議論が展開され、本研究プロジェクトの推進に大きな期待を寄せることができるスタートアップ会議であったように思われる。反面、モンゴル研究者である井上治、岡弘樹両氏の「北東アジア地域」に対する認識、ロシア研究者のパールィシエフ・エドワルド、天野尚樹両氏の同認識、さらにその他のメンバーの同認識には明らかにズレがあり、今後この大きなズレをどのように埋めていくかが課題として浮上した。特にわれわれ北東アジア地域の東端（東アジア）しか専門領域としていない者が、今後どのように問題関心を拡大していけるのか。そのことを真摯に考える必要に迫られていることを痛感した会議でもあった。

海外交流報告

“朝鮮社会科学院学术交流記+α”

NEAR副センター長 福原 裕二

NEARセンター准研究員 崔 穎麗

本年6月7日、私（福原）と崔穎麗さんは大同江のほとりに位置する朝鮮社会科学院を再訪していた。前号では、「新たな交流展開の第一歩を刻む」と題して同院との学术交流の扉が開かれたことを紹介したが、第二歩目の足跡を明瞭に刻もうと、具体的な交流展開の方策を相互で協議するためである。後述するが、目に見えて進展が図られた実りある協議となった。

それにしても今回の再訪朝までの道のりは諸々の逆風続きで、財務省の‘特別送金許可’を得てのものとなった。私には異様な感じが漂う中で、学术交流や調査活動の意義を認め、再訪の実現と成功に尽力して下さった関係諸氏には、冒頭この場を借りて感謝申し上げたい。

そういうわけで、今回の再訪朝は、社会科学院との間の協議の進展に止まらず、36年ぶりに開催された朝鮮労働党第7次大会直後の‘200日戦闘’が滑り出した時期の朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）の様子を見聞きする絶好の機会であって、大変意義深かった。したがって、以下では‘+α’の方が長くなるちぐはぐさを承知の上で、協議の報告に加えて、このたびの見聞記を簡単にしたためてみることにしたい。なお、今回ともに訪朝した崔さんは、常にフィールド・ノートとICレコーダ、デジタルカメラを持ち歩き、それをフル活用して記録にとどめた。その記録がなければ、私が代表して斯くの如き文章をまとめることはできなかつただろう。

* * *

朝鮮社会科学院へは再訪する目的を日本から事前にメールで伝えていたこともあり、同院では交流事業を担当する実務者、私や崔さんの研究領域に比較的近似する近現代史を専門とする研究者（研究室長兼任）、そして前回の協議出席者で経緯をよく知り、古代出雲研究にも意欲を見せる古代史研究者（同前）の3名が出迎えてくれた。「ベストな布陣だ。幸先が良い」。今回はお目にかかることが叶わなかったが、科学指導局長さんの差配では

ないかと私は心の中で感謝した。

今回も協議時間は1時間程度と釘を刺されていたので、形式的な挨拶を交わしたあと、早速本題に移った。まずは、両機関間の交流意志の確認、すなわち両国間の政治・外交的な関係・状況がいかなるものであれ、学术交流や研究活動は展開されるべきであること、可能な限りの学术交流事業の発展を図っていくことについて両者で合意した。次いで、もっとも慎重な協議が必要かもしれないと考えていた、研究集会への誘いについて話を切り出した。未だ協議途上であるため、具体的なことは明らかにできないが、結論としては、私が想定した以上の協力が得られることとなりホッとした。その過程の意見交換では、私の説明に対して熱心に耳を傾け、それを咀嚼するように核心を突く質問と的確なコメントを投げかけて下さることで、交流への真摯さを伝えるようであった。



朝鮮社会科学院での協議

続いて、機関間交流展開の具体的な方策について話が及んだ。私が腹案として秘めていたのは、刊行物交換と社会科学院研究者の紀要（『北東アジア研究』）への投稿である。いずれも相互機関や双方学界の研究動向・水準・関心と、學術の‘作法’を情報共有し理解し合うのにはうってつけの捷路であると考えていた。このことを率直に伝えると、いずれも同意を得ることができた。刊行物交換にせよ、論文投稿にせよ、両者でクリアすべきいくつかの障壁があると思われるものの楽観的に考えており、何より第二歩目の明瞭な足跡を刻む見込みがついたことはとても喜ばしいことであった。

* * *

さて、ここからは‘+ a’に話を転じよう。旅行記風の記述だと、前号の豊田研究員報告と重なる部分が多くなるため、ここでは主な訪問・視察先の簡単な概要報告に努めたい。なお、鄭銀淑編『北朝鮮の楽しい歩き方』（双葉新書、2015年）の紀行文は、このたびの私たちの旅程と重なっているところが多く、併せてお読みいただくのも一興かもしれない。

前回の朝鮮訪問の際には、往路は航空機を利用し、復路は国際列車を利用した。今回は往復ともに航空機を利用した。航空機であれ、国際列車であれ、その一つの楽しみは、隣り合わせた人とのたわいない会話である。往路の飛行機では、ヨーロッパでご活躍中の朝鮮の実業家と隣り合わせた。彼は次のような話をしてくれた。

「私には欧州にも米国にも友達がたくさんいる。政府の関係はどうであれ、個人の間柄は余り関係がない。欧州の投資家たちは、朝鮮こそアジアに残る最後の市場だと言い、機会であると話す。投資は長期的に考えるべきであるから、自分も朝鮮は機会の場であると思う。中国の経済が発展するのにわずか2、30年しかかかっていないから、朝鮮の場合はこの時期を適切に乗り越えれば、早くて5年、10年で劇的に変わると思う。間もなく良くなると思っている。

ここ数年、中国の東北糧食局から朝鮮へ数万トンの古米が売られていた。今はそれがほとんどなくなっている。ベトナムのコメのほうが安いからだ。どこの米だろうと、古米、古古米であろうと価格が安ければそれなりに売れるものだ。大連からだとも1トン当たり490ドル、それが南浦まで来ると500ドルになる。ベトナム産だと430ドルを見積もれば十分だ。現在、朝鮮ではチャンマダンが人気だ。何でもあるよ。中国のものが圧倒的だが、日本製は特に大人気だ。朝鮮では自力更生を提唱しているから、原材料であれば何でも輸入したいね。

制裁が厳しいけど、慣れてきているから気にしない。社会主義であれ、資本主義であれ、人びとを色々な意味で豊かにすれば良いのではないか。資本主義と社会主義の本質的な違いは、個人主義か集団主義の違いであると思っている。現在、朝鮮は少し苦しんでいるけれど、ある国の発展を単一の基準で判断するの

は間違いじゃないかな。朝鮮は辛い道を歩んでいるように見えるかもしれないけれど、それが正しいかどうかの判断は後世に任せたい。少なくとも我々朝鮮人は、将来のための私たちの選択は正しいと確信している。

そんな価値観を持たせるために、国は教育を行っている。私もそうした教育を受けたが、私は本当に首領様（金日成主席）が好きだ。私は起業したこともあり、外交官をしていたこともあるが、何か困難に突き当たった時には労作を読み、首領様の対人術を学んで実践すると、本当に人間関係が円滑に進んだ。私がこのように言うと、欧州の人びとは洗脳されたと言うが、そうではない。私から見ると、欧州の人びとのほうが政府の資本主義思想に洗脳されているように思える」。

こんな興味深い話を聞いているうちに、機体は高度を下げ、平壤の空港に到着した。



平壤国際空港の全景

朝鮮では、各地で田植えと‘200日戦闘’（党大会で提示された「国家経済発展5か年戦略」に基づく、200日間の集中的な生産促進運動）が真っ盛りであり、そんな雰囲気の中を平壤→南浦→平壤→元山→咸興→元山→平壤と移動しながら、調査活動を展開した。

青山共同農場（南浦市江西区域青山里）

共同農場が所在する青山里は、青々とした山のふもとにある村ということで名付けられ、その畑の面積は1,000㎡である。解放直後、朝鮮の農村としてはもっとも荒廃が激しく、暮らしが酷かったため、逆にここを全国のモデル農村にすれば良いと考えられ、その方向で開発が進んだそうである。青山里と言えば、このように「青山里精神、青山里方法」が創

案されたことで（1960年2月5日～8日）、朝鮮の研究者にとってはつとに有名である。「青山里方法の基本は、上部機関が下部機関を助け、目上の人が目下の人を助け、現地に赴いて実情を深く調べ、問題解決の正しい方法を立て、すべての事業で政治事業、人との事業を先に立たせ、大衆の自覚的な熱情と創発性を動員させ、革命課業を執行させることにある」という。



青山共同農場の風景

現在、青山里には、約2,500人の人びとが暮らし、このうち農業に携わる人びとは約1,000人で、これを10個の作業班に分割して共同農場が運営されている。そこでは、肥料1トン当たり穀物10トンを生産する1：10の原則が貫かれており、稲作以外に、果樹園、畜産業、温室栽培（キャベツ、ナス、トマト、キュウリなど）が営まれている。

江西3墓（南浦市江西区域三墓里）

江西3墓は、朝鮮の国宝遺跡第28号に指定されており、2004年には中国と共同で高句麗古墳群として世界文化遺産に登録された。6世紀末から7世紀初めの高句麗第31代嬰陽王とその家族の墓と推定されている墳墓である。大墓、中墓、小墓の3基の古墳が集合していて、大墓、中墓の内部には大変美しい壁画が描かれている。高句麗王は5色の服を着ていたようで、それが古墳内部にも見事に表象されている（黒－冬－北、青－春－東、白－秋－西、赤－夏－南、黄－天－真中）。壁画はガラス板で覆われており、その保存のため内部は湿度90%以上に保たれている。



壁画「四神図」の一部

徳興里古墳（南浦市江西区域徳興里）

徳興里古墳は国宝遺跡第156号に指定されており、江西3墓と同じく2004年に世界文化遺産に登録された。高句麗第24代広開土王時代の408年に作られた墳墓である。古墳内部には、豊富な内容の壁画と600余字が記されており、これにより4世紀後半のこの地の政治情勢と人びとの生活風習、信仰観念、科学技術の発展水準が現在に伝えられている。壁画の写真撮影はダメだと言われていたが、今回特別に2枚だけ撮影が許された（私の度重なるため息と「学生にも見せたいなあ」という独り言の連発を不憚に思ったのかも知れない）。下はその2枚のうちの1枚である。



壁画「流鎗馬」の図

西海閘門（南浦市臥牛島区域）

朝鮮の紙幣図案に採用されたこともある北東アジア有数の運河「西海閘門」。1981年から86年のおよそ5年間にかけて、総額40億ドル、約3万人の軍人を投じて建設され、橋梁の長さは南浦市から黄海南道までの8キロに及ぶ。上流は大同江、下流は朝鮮西海で、36の水門により大同江の水位を調整している。

水門を一齐に開くと、毎秒4万2千立方キロの水が海に注がれるという。閘門には三つの閘室が備えられており、1号室は2,000トン級、2号室は5万トン級、3号室は2万トン級の船舶が通過できる。2号室から3号室までの幅は100メートルで、その堰堤の上には回転橋が設置され、鉄道、自動車道、歩道が敷設されている。回転橋の下を船舶が通り抜けるときには、5分の回転時間をかけて閘室が開き、普段だと大型船舶約25隻、小型船舶約数10隻が通過するという。閘門の周辺では、ボラ、ウナギ、フグなどの養殖もしていて、付近の専門店でも味わうことができる（私は食べた経験がないけど…）。



西海閘門の全景

千里馬製鋼連合企業所（南浦市千里馬区域鋼鉄洞）



製鉄所内部の様子

千里馬製鋼連合企業所は、敷地面積210万㎡を擁し、従業員1万2,000名（うち機能工4,850名、技師1,570名）で、鋼鉄生産能力・鋼材生産能力ともに60万トンを有し、総生産額31億2,000万ウォン（1人当たり生産額36万9,000ウォン）を誇る、朝鮮随一の製鉄・製鋼企業体である。1956年11月15日、1万ト

ン増産の任務に応え‘千里馬大高潮’を呼び起こしたことで朝鮮ではつとに有名である。現在、平年10万トンの生産を行っており、輸入に頼らず、コークスに代えて無煙炭で鉄を溶かす‘主体鉄’の生産に取り組んでいる。我々をガイドして下さった女性案内員の方は、日本の奈良県に親戚がおられるようで、大変丁寧に説明を行って下さった。なお、この企業所で外国人を案内したのは今回が初めてだったそうである。

江西鉱泉水工場（南浦市江西区域薬水里）

この地域には、今から約300年前、ケガをした農夫が湧き水を飲み、ケガに塗布したところ、治癒したという伝説が残っている。地下130メートルから噴き出してくるこの薬水を処理し、日産5万本程度生産して人民に提供しているのが江西鉱泉水工場である。私は工場で瓶詰めホヤホヤの‘江西薬水’を試飲させていただいた途端にはまってしまった。はやりの炭酸水のような味わいである。平壤で買うと米ドルで1本0.6ドル、それが工場を買うと半額。箱買いして10数本持ち帰って来たが、残り2本が冷蔵庫に眠っているだけである。



鉱泉水（薬水）工場の様子

平壤ナマズ工場（平壤市楽浪区域）

ナマズ料理とウナギ料理、日本では圧倒的にウナギ料理が人気だが、世界的にはナマズ料理のほうがスタンダードである。その食用ナマズをアフリカから輸入し、近くの火力発電所から排出される温水などを利用した、徹底したCNCの温度管理のもとで養殖を行っているのが平壤ナマズ工場である。2002年4月に開業した。



ナマズへの餌やりの様子

現在、4つの室内肥育場と102の野外池（ビニール養殖）で養殖を行っており、年産は2,500トンである。ちなみに、上の画像のような一つの野外池で、15～20トンの生産が可能だという。ナマズ料理は滋養強壮、体力回復、虚弱改善、肝炎、糖尿などにも効果があるそうで、平壤市内だけでもナマズ料理店が8店舗存在する。年産2,500トンのうち、2,000トンは平壤市民に提供し、残りの500トンはそうした料理店に供給して、工場経営に充てられる目標だという。工場の人びとは1食20ウォンを支払って、職員食堂で食べるそうだが、ナマズ料理も食することができるのだろうか。

泉三協同農場（江原道安辺郡泉三里）

泉の湧出する3つの村が合わさった、「そのままやがな…」の地名を冠する泉三共同農場は、柿の名産地として知られている。1961年に金日成主席が訪れた際、同主席は「柿が熟した景色は見事である」と言いながら、ある柿の木を指し示し、「あの木には柿が何玉実っているか」と下問した。現地の案内員たちが「500玉くらいでしょう」と答えたら、主席は「いや、800玉はある」と応じた。あとで数えてみたら、803玉だった。朝鮮の人びとは3という数字を好む。予想の玉数から3残ったのは幸福の証である。そんな逸話がこの農場にはたくさん残っている。

そんな共同農場では、柿のほかに稲やトウモロコシ、小麦、ジャガイモなど多くの野菜を生産している。1,300人の人びとが5つの作業班、1つの作業班が4つの分組に組織されて共同生活を営んでおり、そのうち農業に携わっているのは約半数の630人である。こ

こ数年は、生産力向上のため、個人宅の庭の周りの30町は自由な可処分を認める「個人田圃管理責任制」が実施されている。私もある分組長のお宅を訪問させていただいたが、手入れの行き届いた庭には、見事に実った白菜やカボチャ、ほうれん草などを見ることができた。



共同農場の敷地の一部

元山農業大学（江原道元山市）

元山農業大学は、朝鮮建国直前の1948年9月1日に創立され、「農業大学の長男」、「実力がある大学」と金正日総書記から太鼓判を押された名門大学である。5年制大学であり、農業、園芸、畜産など農業関連の9学部を擁し、約5,000人の学生が在籍している。多くの留学生を受け入れ、輩出していることもこの大学の特徴であるという。全寮制で、7棟の校舎と幾つかの研究所、実習所を有している。



元山農業大学の校舎

咸興本宮（咸鏡南道咸興市城川江区域）

咸興本宮は、朝鮮王朝の開祖李成桂が若年時に暮らし、王位を譲ったあともしばしば訪

れたことで知られる邸宅跡である。李成桂死後は、祭祀を行う場所として利用されたという。邸内の‘蓮華の池’は700年の歴史を有しており、‘咸興万松’と名付けられた天然記念物の大松は450年以上もの樹齢を数える。

ところで、朝鮮では李成桂をあまり高く評価しないそうである。なぜなら、李成桂が王位に就いたときは、前代よりも国土面積が狭くなったからだという。



咸興本宮の敷地内部

咸鏡南道革命事績館 (咸鏡南道咸興市東興山区域)

咸鏡南道の道庁所在地である咸興は、咸興湾に面し、‘咸南の炎’に代表される化学、機械、紡織などの重要かつ大規模な工場を抱える地で、約6～70万の人口を有する。その地には大量の土砂を運び込み人工的に造設された、東方の工業都市咸興の丘に由来する‘東興山’という高台がある。咸鏡南道革命事績館はその東興山に隣接している。



事績館の‘スローガンの木’展示

事績館は解放直後の1946年4月に創設された伝統ある施設であるが、近年そこを訪れ参観した金正日総書記が、「(展示内容が)平壤

の縮小版である。地域性を強調したほうが良い」とする旨の指摘を行い、2011年に新装オープンした。事績館には21の展示室が配置されているが、そう言われてみると、咸鏡南道各市・各郡・各区域の発展沿革、主要大工場の成り立ちと足跡、道内革命活動とその史蹟の案内などが凝縮したような展示内容である。もっとも目を引いたのは、道内で発見されたとする‘口号木 (スローガンの木)’の展示である。401点発掘されたうちの数十点の「実物」が展示されていた。平壤の朝鮮革命博物館にはさらに多くの展示があるそうだが、写真撮影は不可なので、ここぞとばかりに撮影して帰った。

興南肥料工場 (咸鏡南道咸興市興南区域)

興南肥料工場は、朝鮮が日本の植民地下に置かれていた時代に創設された朝鮮窒素肥料興南工場 (野口遵の日窒コンツェルンが朝鮮に進出して設立) を前身とする。見る人が見れば、きっと面影を偲ぶことができるのであろうが、私はただ巨大な設備、広大な敷地に圧倒されっぱなしであった。



肥料工場敷地内の様子

工場の敷地内に入ると、元技術長であったという老巧な風貌の方が出迎え案内をしてくれた。技術畑であっただけに、化学の授業のような説明にはまったく淀みがない。「アンモニアは窒素と水素の化学物だ。分かるね。窒素は水を電気によって水素と酸素に分離させた後、褐炭を焼いて水素と炭素を抜き取って得る。窒素は空気中にたくさんあることは知っていると思うけど、これを-200度に下げると、水と分離する。その温度差から窒素、酸素を取り出してアンモニアを得たあとにそ

このアンモニア塔に入れ、残りの廃棄物は捨てる。環境汚染はありません。1対3でガスを取って、最後には液体になるのですよ。説明にはついてきていますか。ここで生産している肥料には3種類があって、一つは尿素、アンモニアと炭酸ガスです。二つ目は窒素だね。アンモニアと硝酸。三つ目が硫酸で、アンモニアと硫酸です。あとで肥料の実物を見てもらいましょう。朝鮮では温度500度、圧力320気圧で鉄を触媒剤に使っているが、これこそ自力更生。原油を使えばもっと簡単だけど、原油は朝鮮にないから、少し辛いけど仕方がないよね…。そんな興南肥料工場は、全国の中小化学製品工場の母体であり、40万㎡の敷地に分工場を4つ有し、約6～7千人の従業員が年に1度の1か月間の補修期間以外には3交替で休みなく就業して、日産1,500トンの肥料を生産しているという。

松濤園国際少年野営所（江原道元山市）

松濤園は、元山市北方の文川市との境界に位置する風光明媚な観光地区である。そのど真ん中に松濤園国際少年野営所がある。11歳から13歳までの児童・生徒のうち、成績優良者が全国の各学校より推薦されて入所することができる。二重、三重の「赤旗革命組」称号を受けると、2回まで入所できるそうである。言わばご褒美的施設であり、「甘やかさすぎではないか」と思えるほど児童・生徒が好みそうな内装、設備が施され、アミューズメント施設、体験・実習場が整えられていて、まさに子どもの楽園である。元々、1960年に建てられた施設であるが、1991年に大規模な改修が行われ、1993年に竣工したときには、敷地面積34万㎡、収容人員1,250人であったという。その後、2013年に再び改修が行われ、現在の設備を擁するようになったのは、2014年5月2日のことである。

敷地内には、遊園地、ボート漕ぎやウォータースライダーなども楽しめる湖、植物園、水族館、鳥類園、運動場などが敷設されている。また、野営場の建物は、二つに分かれており、館内には宿泊施設、調理実習室、ゲームセンター、医務室、理美容室、映画館（929席）、売店、食堂（500席）などが整備されている。宿泊施設は一見したところホテルのような充実ぶりで、もちろんトイレやシャワー

ルームも備えられている。



野営所施設で調理実習を行う生徒たち

野営所では、1月から3月にかけては500名ずつ5期に分けて、それぞれ10日間受け入れている。4月から10月にかけては、1,000名ずつ10期に分けて、同じく10日間受け入れているという。児童・生徒にとってはあっという間の10日間の研修だそうで、朝7時起床、夜10時就寝であるが、興奮してなかなか寝ようとしないのが引率者、野営所職員の悩みらしい。

終わりに

冒頭にも記したが、このたびの訪朝もまた、大学関係者、朝鮮の受入機関の方々の支援や協力があって実現した。重ねて感謝申し上げたい。とくに、朝鮮の受入機関の方々は、口も目も耳も、頭も体もわがままな我々に対し、「そんなこと言っちゃいけない」、「そんなことしっちゃいけない」、「そんなところ見っちゃいけない」、「そんなところ行っちゃいけない」などと一切言わず、可能な限り手配を行ってくれて、長旅に付き合ってくれた。学術交流や研究・教育活動の成果を出すことが、大学の研究者としては一番の恩返しだろう。



自ら送ったエアメール

NEAR短信 (2016年4月～9月)

研究会活動

- “心の問題” 勉強会（4月定例会）

【日時】

2016年4月21日（木）16：30～18：00

【場所】

講義・研究棟3階 会議室C

【報告者・テーマ】

福原裕二氏（NEARセンター研究員）「“心の問題” から見たボーダースタディーズ」

- “心の問題” 勉強会（5月定例会）

【日時】

2016年5月13日（金）16：30～18：00

【場所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

山田寛人氏（広島・山口大学非常勤講師）「日韓共同歴史教科書は可能か—『事実』をめぐる『評価』について考える」

- 北東アジア研究会第1回例会

【日時】

2016年6月17日（金）14：00～16：20

【場所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

王中沈氏（中国・清華大学教授）「清朝期における張家口の地政学的な位置と機能の変化」

娜荷芽氏（内蒙古大学講師）「『蒙民厚生会』・

『蒙民裕生会』・『蒙民振興会』の設立及びその活動」

- 第43回日韓・日朝交流史研究会／“心の問題” 勉強会（6月定例会）

【日時】

2016年6月17日（金）16：30～18：00

【場所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

八田靖史氏（コリアン・フード・コラムニスト）「食の日韓交流：相互に根付く食文化の現在」

- 北東アジア研究会第2回例会／“心の問題” 勉強会（7月定例会）

【日時】

2016年7月7日（木）16：30～18：30

【場所】

講義・研究棟3階 会議室C

【報告者・テーマ】

趙眞九氏（韓国・高麗大学校グローバル日本研究院研究教授）「日韓の歴史和解は可能か」

前田しほ氏（NEARセンター研究員）「ロシアの戦争記念碑について—ナショナルイデオロギとジェンダー—」

- 第44回日韓・日朝交流史研究会／北東アジア研究会第3回例会

【日時】

2016年7月12日（火）16：30～18：00

【場所】

講義・研究棟3階 大演習室2

【報告者・テーマ】

池内敏氏（名古屋大学大学院文学研究科教授）「竹島—もうひとつの日韓関係史」

- 北東アジア研究会第4回例会

【日時】

2016年7月27日（水）16：30～18：00

【場所】

講義・研究棟2階 会議室B

【報告者・テーマ】

呉光輝（厦門大学教授）「西田幾多郎と東方」

研究員の研究活動の成果

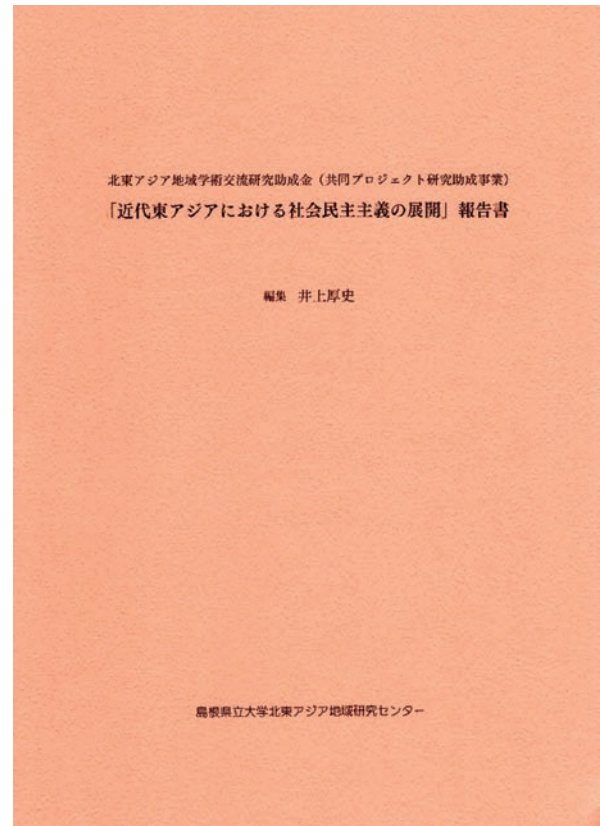
※宇野重昭名誉研究員、江口伸吾研究員、李曉東研究員の共編書『中国式発展の独自性と普遍性：「中国模式」の提起をめぐって』（国際書院、2016年）が出版されました。上の編者3名に加え、佐藤壮研究員の論考も収録されています。



宇野重昭・江口伸吾・李曉東 編

国際書院

※井上厚史研究員が編集を行った『「近代東アジアにおける社会民主主義の展開」報告書』（島根県立大学北東アジア地域研究センター、2016年）が発行されました。飯田泰三名誉研究員、井上厚史研究員、山本健三研究員、李曉東研究員、新井健一郎客員研究員ほかの論考が収録されています。非売品ですので、関心がおありの方は本センターまでご連絡下さい。



NEARセンター市民研究員の活動一覧 (2016年4月～8月)

- 第1回NEAR センター交流懇談の集いの開催
【日時】
2016年4月16日（土）13：00～16：00
【場所】
島根県立大学浜田キャンパス交流センター
1階 研修室
【内容】
井上厚史NEAR センター長挨拶、NEAR センター研究員紹介、NEARセンター概要・市民研究員制度説明、参加者自己紹介、グループ・リサーチ・サロン／共同研究の情報交換など。
- 第2回NEAR センター交流懇談の集いの開催
【日時】
2016年5月14日（土）13：00～16：00
【場所】
島根県立大学浜田キャンパス交流センター

1階 研修室

【内容】

村井洋NEAR研究員挨拶、NEARセンター研究員紹介、NEARセンター概要・市民研究員制度説明、参加者自己紹介、グループ・リサーチ・サロン／共同研究の情報交換、大学院生との共同研究のためのマッチングなど。

対する経済政策・文化政策と仏教復興の関与者（アクター）を中心として—」

- ・李萌（大学院生）／澁谷善明（市民研究員）
「多文化共生社会におけるメディアの役割—在日中国人向けエスニック・メディアとマスメディア及び地方メディアの相互作用の観点から—」

○第1回市民研究員全体会の開催

【日時】

2016年5月21日（土）15：00～17：00

【場所】

島根県立大学浜田キャンパス交流センター
1階 研修室

【内容】

井上厚史NEARセンター長挨拶、参加者（NEARセンター研究員、市民研究員、大学院生）自己紹介、記念撮影、グループ・リサーチ・サロン／共同研究の情報交換、施設案内（希望者）

○第1回市民研究員研究会の開催

【日時】

2016年7月16日（土）14：00～17：00

【場所】

島根県立大学浜田キャンパス講義・研究棟
1階 中講義室4

【内容】

井上厚史NEARセンター長挨拶、第1部：アカデミック・サロン（講師：井上厚史NEARセンター長）、「大学院生と市民研究員の共同研究」助成事業審査結果発表、第2部：市民研究員による研究発表…郭雪奕氏・若林一弘氏「宋寨村（河南省焦作市）の村芝居座」

○平成28年度NEARセンター市民研究員と大学院生の共同研究助成事業に3件の研究課題が採択されました。

- ・王節節（大学院生）／滑純雄（市民研究員）
「中国と日本の都市生活ごみの分別・収集・処理の比較について—蘇州市、広島市、浜田市を対象にして—」
- ・格格日勒（大学院生）／岡崎秀紀（市民研究員）
「破壊と再興に見る内モンゴル・フレイ旗社会における仏教のあり方—復興に

NEAR News 第50号

2016年9月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/>